

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	小・中・高等学校におけるキャリア教育の啓発的経験の積み重ねによる効果の検討
Author(s)	児玉, 真樹子
Citation	学習開発学研究 , 15 : 97 - 104
Issue Date	2023-03-30
DOI	
Self DOI	10.15027/53790
URL	https://doi.org/10.15027/53790
Right	Copyright (c) 2023 広島大学大学院人間社会科学研究科学習開発学領域
Relation	



【資料】

小・中・高等学校におけるキャリア教育の啓発的経験の 積み重ねによる効果の検討

児玉真樹子
(2023年2月2日 受理)

Effects of accumulation of exploratory experiences during career education in elementary, junior high, and senior high schools

Makiko KODAMA

問題と目的

キャリア教育における啓発的経験

「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」(中央教育審議会, 2011, p.17)と定義されるキャリア教育では、社会や職業にかかわる様々な現場における体験的な学習活動を通して、子ども・若者に自己と社会の双方についての多様な気づきや発見を得させることが重要であるとされている。また1974年の「進路指導の手引き—中学校学級担任編」では、進路指導の重要な活動の一つとして、「生徒がいろいろな経験を通して、自己の適性や興味などを確かめ、具体的な進路情報の獲得に役立つ諸経験の総称」と定義される「啓発的経験」が挙げられている(三村, 2008)。三村(2008)は「体験」を「児童生徒が直接五感を通して得る行為」、「経験」を「体験によってももの見方や考え方が形成されること」と区別し、啓発的経験を「体験」したことを啓発的なプロセスにより「経験」のレベルに引き上げることと位置付けている。以上を踏まえ、キャリア教育では、社会や職業にかかわる様々な現場における体験活動を通じて、自己の適性や興味の理解といった「自己理解」と、進路情報の獲得や職業社会に関わる気づきなどの「進路(職業、上級学校など)理解」の2側面を促進する「啓発的経験」が求められている。

小学校、中学校、高等学校での啓発的経験のキャリア形成への影響

渡部・渡部・小池(2015)は啓発的経験を通して自己理解、仕事理解を深め、その後のキャリア形成につながるという構造モデルを提唱している。これを踏まえて児玉(2019)は、小学校、中学校、高等学校の各段階で行われている体験活動が啓発的経験となっているのか、またそれらの啓発的経験を通しての「自己理解」や「進路(職業、上級学校など)理解」がその後のキャリア形成にどのような影響を示すのかについて、大学生を対象とした回想法を用いた調査を実施して検討した。分析の結果、小学校、中学校、高等学校全ての体験活動で、自己理解や進路(職業、上級学校など)理解の度合の得点が全般的に高く、啓発的経験として機能していると解釈された。また多くの学生が経験していた中学校での職場体験や高等学校でのオープンキャンパスや上級学校の授業受講において、自己理解と進路(職業、上級学校など)理解の深まりに大きな効果があり、かつ自身の進路選択に役立っていると認知していることが確認された。さらに小学校での様々な体験活動は、自己理解や進路(職業、上級学校など)理解を深めることで、現在(大学時点)のキャリア形成の促進に効果があることが示唆された。具体的には、キャリア形成の指標としてキャリア教育で育成を図っている「基礎的・汎用的能力」に着目すると、小学校での「職場見学・体験等を主体とした修学旅行等」や「あこがれの仕事調べ」での自己理解の深まり度合が、また小学校での「農業体験」や「地域の名人やお年寄りや芸術家に学ぶ体験」や「職場見学」や「お店調べ・スーパーマーケット調べ」での進路(職業、上級学校など)理解の深まり度合が、大学生の有している「基礎的・汎用的能力」と有

意な正の関係を示した。

本研究の目的

児玉（2019）では、各学校段階での各体験活動を通しての自己理解や進路（職業、上級学校など）理解の各々と、その後のキャリア形成の度合との関係は明らかになった。一方でキャリア教育の効果は各学校段階の各取り組みの積み重ねによると考えられるが、それについては分析していない。よって本研究では児玉（2019）のデータの再分析を通して、異なる学校段階での体験活動を通しての自己理解や進路（職業、上級学校など）理解の積み重ねによる効果についての基礎資料を得るために、次の3点を明らかにする。

(1) まずは各学校段階での体験活動のいずれかを通して自己理解および進路（職業、上級学校など）理解が深まったと感じている者の割合の実態を明らかにする。さらに前の学校段階で自己や進路（職業、上級学校など）に関する理解が深まる経験の有無が、次の学校段階での自己や進路（職業、上級学校など）に関する理解の深まり度合に影響を及ぼす可能性について検討する（目的1）。

(2) 大学生にとっての直近の進路選択は高等学校卒業時の進学先である大学選択である。よって大学選択に特に関わりの深い高等学校での「オープンキャンパスや上級学校の授業の受講」が自身の進路選択へ役立っている度合に影響を及ぼす要因を検討する。Parsons（1909）の特性因子理論を踏まえると、自分の興味や関心などに関わる理解と進学先や将来就きたい職業にかかわる理解が進学先の選択の基盤となるため、「オープンキャンパスや上級学校の授業の受講」によって自己理解や進路（職業、上級学校など）理解が深まるほど、進路選択への役立ち度合は高くなるであろう。「オープンキャンパスや上級学校の授業の受講」を通しての自己理解や進路（職業、上級学校など）理解の深まり度合を規定する要因として、その前段階の中学校の体験のうち、児玉（2019）で自己理解度と進路（職業、上級学校など）理解度の得点が高く、かつ経験者数が多い、「職場体験」に着目する。以上より、中学校での「職場体験」および高等学校での「オープンキャンパスや上級学校の授業の受講」を通しての自己理解度と進路（職業、上級学校など）理解度と、高等学校での「オープンキャンパスや上級学校の授業の受講」の進路選択への役立ち度との関連をみる（目的2）。

(3) 児玉（2019）で、大学生の基礎的・汎用的能力の保有程度と、小・中・高等学校での体験活動を通しての認知の変化（自己理解度や進路（職業、上級学校など）理解度や進路決定への役立ち度）との間に関連がみられた。しかし一人一人の各学校段階の体験活動の積み重ねで見ると、小学校の体験活動では自己理解のみ深まったが、中学校では進路（職業、上級学校など）理解のみ深まったタイプや、どの段階においても自己理解も進路（職業、上級学校など）理解も深まったタイプや、いずれも深まらなかったタイプなど、様々なタイプが考えられる。このような、各学校段階の体験活動を通しての認知の変化にかかわる積み重ねのタイプによる、大学生の基礎的・汎用的能力の保有程度の違いについては、未検討である。また体験活動の積み重ねの効果を考えるとき、その活動内容に何らかの共通性があり、前の段階の体験活動での学びが次の段階の体験活動での学びに影響を及ぼす可能性がある体験活動の組み合わせで考える必要があるであろう。以上より、本研究では児玉（2019）で大学生の基礎的・汎用的能力の保有程度と関連がみられた体験活動のうち、実際の職場に赴いてそこでの仕事内容を理解するという点で共通点がある、小学校での「職場見学」と中学校での「職場体験」に着目し、小学校と中学校の各々の活動を通しての認知の変化のタイプによる基礎的・汎用的能力の形成度合の違いについて検討する。具体的には小学校での「職場見学」と中学校での「職場体験」を通しての自己理解度、進路（職業、上級学校など）理解度、進路決定への役立ち度の組み合わせのタイプと、大学時点での基礎的・汎用的能力の保有程度との関連をみる（目的3）。

方法

児玉（2019）のデータの一部を利用した。

調査方法と調査対象者

2018年6月～7月に、「小・中・高における体験活動とキャリア意識に関する調査」というタイトルの調査用紙を用いて集合調査を実施した。なお個人を特定することはないこと、調査への参加は任意であることを調査用紙の表紙に明記した。調査対象者は学部3、4年生計95人であり、欠損値を含まない有効回答は84人であった（3年生の男性20人、女性61人、4年生の男性1人、女性2人）。上述の目的1を分析する際にはこの84人のデータを用いた。目的2を分析する際には、こ

のうち中学校での職場体験と高等学校でのオープンキャンパスや上級学校の授業の受講の両方を経験した 52 名分のデータを用いた。目的 3 を分析する際には、このうち小学校での職場見学と中学校での職場体験の両方を経験した 69 人分のデータを用いた。

調査項目

児玉 (2019) で回収したデータのうち、体験活動の経験の有無と経験有の場合のその経験での認知の変化 (自己理解度、進路 (職業、上級学校など) 理解度、進路決定への役立ち度)、基礎的・汎用的能力を、本研究の分析対象データとした。

体験活動の経験の有無とその活動での認知の変化 小学校での体験活動としては、「酪農体験等を組み込んだ林間学校」、「職場見学・体験等を主体とした修学旅行等」、「あこがれの仕事調べ」、「農業体験」、「地域の特産物づくり」、「商店でのお手伝い」、「地域の名人やお年寄りや芸術家に学ぶ活動」、「身近な人の職業から学ぶ活動」、「職場見学」、「お店調べ・スーパーマーケット調べ」の 10 種類の活動について、中学校での体験活動としては「職場体験」、「職場見学」、「身近な人の職業調べ」、「身近な人の職場訪問」、「ジョブシャドウイング」、「アントレプレナーシップにかかわる体験活動」、「商業・商人体験」、「農業体験」の 8 種類の活動について、高等学校での体験活動としては「職場や研究機関の訪問見学」、「地域の職業人に職業生き方を学ぶ調査活動」、「インターンシップ」、「デュアルシステム」、「熟練技術者を学校に招いての技術指導」、「学校オリジナル商品を開発してそれを販売する活動」、「オープンキャンパスや上級学校の授業の受講」の 7 種類の活動について、それぞれの経験の有無を尋ねた。経験した体験活動に対しては、自己理解度として「この経験によって自分自身の理解が深まった」という設問で、進路 (職業、上級学校など) 理解度として「この経験によって特定の職業や進路 (上級学校等) に関する理解が深まった」という設問で、進路選択への役立ち度として「この経験によって自分自身の進路を選択するのに役立つ」という設問で尋ね、非常によくあてはまる (4 点) から全くあてはまらない (1 点) の 4 段階評定で回答を求めた。

基礎的・汎用的能力 大嶋・廣川・宮崎・芳賀 (2016) の開発した基礎的・汎用的能力の測定尺度 (全 17 項目) を用い (Table 1)、「非常によくあてはまる (4 点)」から「全くあてはまらない (1 点)」の 4 段階評定で回答を求めた。有効回答の得られた 84 名のデータを用い信頼性係数を算出した。人間関係形成・社会形成能力は当初の 5 項目では α 係数の値が .60 未満であったため、他の項目との相関が低い 1 項目を除外して α 係数を算出したところ .63 となったことから、この 1 項目を除外して、4 項目の平均値をこの能力の得点とした。次に自己理解・自己管理能力は 3 項目で α 係数が .45 と低いもの (他の項目と相関の低い項目を除外してもさらに低くなった)、本研究では基礎的・汎用的能力の 4 つの能力全ての状態について把握したいため、この指標も用いることとし、3 項目の平均値をこの能力の得点とした。課題対応能力は 4 項目で .64、キャリアプランニング能力は 5 項目で .68 となったため、各々の平均値を各々の能力の得点とした。

Table 1. 基礎的・汎用的能力にかかわる質問項目

因子	質問項目	備考
人間関係形成・ 社会形成能力	他者と協力して、活動することができる	除外
	チームの中で自分の役割を理解できる	
	自分と異なる意見であっても、受け止めることができる	
	相手の立場に立って、考えることができる	
自己理解・ 自己管理能力	相手の立場や意見を尊重して、意見を述べることができる	
	自分がどのようなことに意義を感じるのか、理解している	
	自分がやりたいことは、明確である	
課題対応能力	自分の能力や、できることを把握している	
	自分の立てた計画に基づいて行動できる	
	物事を進めるときに適切な計画を立てることができる	
	課題の解決に必要な情報を収集できる	
	課題の解決策を何通りも考えることができる	
キャリアプランニング能力	自分で得た情報を将来設計のために活用できる	
	自分の将来のために必要な情報を積極的に収集できる	
	自分の考えを基に職業を選ぶことができる	
	大学で学ぶことを将来の職業に結びつけて考えることができる	
	自分の将来の可能性を肯定的に捉えている	

注.備考に「除外」とある質問項目は、 α 係数の値が低かったためこの項目を除外して他の項目のみを使用したことを表す。

結果と考察

各学校段階での体験活動を通しての自己理解および進路（職業、上級学校など）理解の深まり経験の実態（目的1）

本調査で扱った小学校での体験活動 10 種類のうちいずれかで自己理解が深まった者（自己理解を問う設問で「非常によくあてはまる」「ややあてはまる」に回答した者。以下同様）は 77 人（92%）、進路（職業、上級学校など）理解が深まった者は 63 人（75%）であった。中学校での体験活動 8 種類のうちいずれかで自己理解が深まった者は 73 人（87%）、進路（職業、上級学校など）理解が深まった者は 71 人（85%）であった。高等学校での体験活動 7 種類のうちいずれかで自己理解が深まった者は 59 人（70%）、進路（職業、上級学校など）理解が深まった者は 57 人（68%）であった。また、小・中・高等学校において何らかの体験活動を通しての自己理解の深まりの経験の有無別にみた人数は Table 2 のとおりに、進路（職業、上級学校など）理解の深まりの経験の有無別にみた人数は Table 3 のとおりになった。この結果より、ほとんどの学生（自己理解で 81 名 96%、進路（職業、上級学校など）理解で 79 名 94%）がいずれかの学校段階の体験活動を通して自己理解もしくは進路（職業、上級学校など）理解が深まったと認知していることが明らかになった。

なお、隣接する 2 つの学校段階（小学校と中学校、中学校と高等学校）に着目し、前の学校段階での自己理解の深まり経験の有無によって、次の学校段階での自己理解の深まり経験の有無に違いがあるかについて、フィッシャーの直接法を用いて確認した。進路（職業、上級学校など）理解についても同様に確認した。その結果、自己理解については、小学校と中学校で有意（ $p<.001$ ）、中学校と高等学校では有意傾向（ $p<.10$ ）となり、進路（職業、上級学校など）理解については、小学校と中学校（ $p<.01$ ）、中学校と高等学校（ $p<.001$ ）で共に有意な結果となった（有意水準は 5%、以下同様）。すなわち自己理解も進路（職業、上級学校など）理解も、前の学校段階で深まった経験の有無により、次の学校段階で深まった経験の有無に差異がみられることが確認された。前の学校段階で深まった者は次の段階でも深まった割合が高い傾向がみられたが、前の学校段階で深まらなかった者ではそのような傾向は一概にはみられなかった。

Table 2. 各学校段階での体験活動での自己理解の深まり経験の有無別にみた人数

小学校	中学校	高等学校		計
		無	有	
無	無	3	2	5
	有	0	2	2
	計	3	4	7
有	無	3	3	6
	有	19	52	71
	計	22	55	77
計		25	59	84

Table 3. 各学校段階での体験活動での進路（職業、上級学校など）理解の深まり経験の有無別にみた人数

小学校	中学校	高等学校		計
		無	有	
無	無	5	3	8
	有	4	9	13
	計	9	12	21
有	無	5	0	5
	有	13	45	58
	計	18	45	63
計		27	57	84

高等学校での「オープンキャンパスや上級学校の授業の受講」における自身の進路選択に役立ち度と、自己理解および進路（職業、上級学校など）理解の関連（目的2）

大学生にとっての直近の進路選択である大学選択に特に関わりの深い高等学校での「オープンキャンパスや上級学校の授業の受講」による自身の進路選択への役立ち度に影響を及ぼす要因を検討する。そのため、中学校での「職場体験」および高等学校での「オープンキャンパスや上級学校の授業の受講」を通しての自己理解度と進路（職業、上級学校など）理解度と、高等学校での「オープンキャンパスや上級学校の授業の受講」による自身の進路選択に役立ち度との関連をみる。

ここでは、最終変数（第3ステップに投入する変数）として高等学校での「オープンキャンパスや上級学校の授業の受講」の進路選択に役立ち度を設定し、それに影響を及ぼす要因（第2ステップに投入する変数）として、同じく高等学校での「オープンキャンパスや上級学校の授業の受講」を通しての自己理解度と進路（職業、上級学校など）理解度を想定し、これらを規定する要因（第1ステップに投入する変数）として、以前の経験である中学校での「職場体験」を通しての自己理解度と進路（職業、上級学校など）理解度を想定して、パス解析を実施した。具体的にはステップ1とステップ2の変数を説明変数、ステップ3の変数を目的変数とした重回帰分析（ステップワイズ法）と、ステップ1の変数を説明変数、ステップ2の変数の各々を目的変数とした重回帰分析を行った。その結果、Figure 1 のとおりとなった。

この結果より、「オープンキャンパスや上級学校での授業の受講」を通して、自分の興味・関心など自己の理解と、将来就きたいと考えている職業や進学を考えている上級学校など進路の理解が深まるほど、「オープンキャンパスや上級学校での授業の受講」が自分の進路選択に役に立っていると感じていることが確認され、さらに高等学校での「オープンキャンパスや上級学校での授業の受講」を通しての自己理解は中学校での「職場体験」での自己理解が深まっているほど、同様に高等学校での進路（職業、上級学校など）理解は中学校での進路（職業、上級学校など）理解が深まっているほど、深まること became clear. このことから中学校、高等学校の各学校段階で自己理解や進路（職業、上級学校など）理解を深めることを積み重ねていく重要性が示唆された。

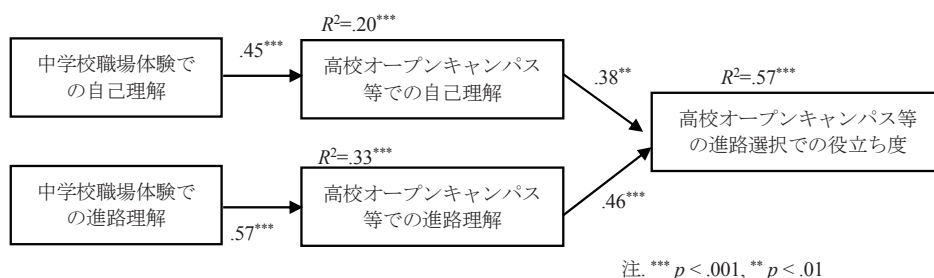


Figure 1. パス解析の結果

小学校での「職場見学」と中学校での「職場体験」を通しての認知の変化と基礎的・汎用的能力の関連（目的3）

小学校での「職場見学」と中学校での「職場体験」での認知の変化のタイプを分類するために、各々の体験活動の自己理解、進路（職業、上級学校など）理解、進路決定への役立ちの各度合の得点に基づいてユークリッド距離を用いた Ward 法によるクラスター分析を行った。その結果、5つのクラスターに分類することが最も妥当な解釈ができるものと考えられた。小学校での「職場見学」と中学校での「職場体験」の各々の自己理解、進路（職業、上級学校など）理解、進路決定への役立ちの各度合について各クラスターの得点をグラフにしたところ、Figure 2 のとおりとなった。これらを従属変数とした分散分析の結果 (Table 4)、全てでクラスターによる有意な主効果がみられた。多重比較 (Tukey 法) の結果、小学校での「職場見学」での自己理解度の得点は、クラスター5はクラスター2と3より、クラスター4はクラスター2より有意に高かった。進路（職業、上級学校など）理解度の得点はクラスター1と4と5はクラスター2より、さらにクラスター2はクラスター3より有意に高かった。進路決定への役立ち度の得点はクラスター1と4がその他3つより有意に高かった。中学校での「職場見学」での自己理解度の得点は、クラスター4がクラスター1と3より、さらにクラスター1と3はクラスター2より有意に高く、またクラスター5はクラスター2より有意に高かった。進路（職業、上級学校など）理解度の得点はクラスター

4がクラスター1より、またクラスター1がクラスター2より有意に高く、またクラスター3と5がクラスター2より有意に高かった。進路決定への役立ち度の得点はクラスター4がクラスター1と2と5より有意に高く、またクラスター3がクラスター1と2より高く、クラスター5がクラスター2より有意に高かった。以上を踏まえ、各クラスターを次のように命名した

- (a) 全て中程度群 (クラスター1) : すべての得点が中程度の群 (8名)。
- (b) 全て低群 (クラスター2) : すべての得点が低い群 (11名)。
- (c) 小学校で低く中学校で高い群 (クラスター3) : 小学校の各度合が低く、中学校の各度合が比較的高い群 (20名)。
- (d) 全て高群 (クラスター4) : すべての得点が高い群 (18名)。
- (e) 小学校の進路決定への役立ち度のみ低群 (クラスター5) : 小学校での進路決定への役立ち度の得点のみ低く他は高い群 (12名)。

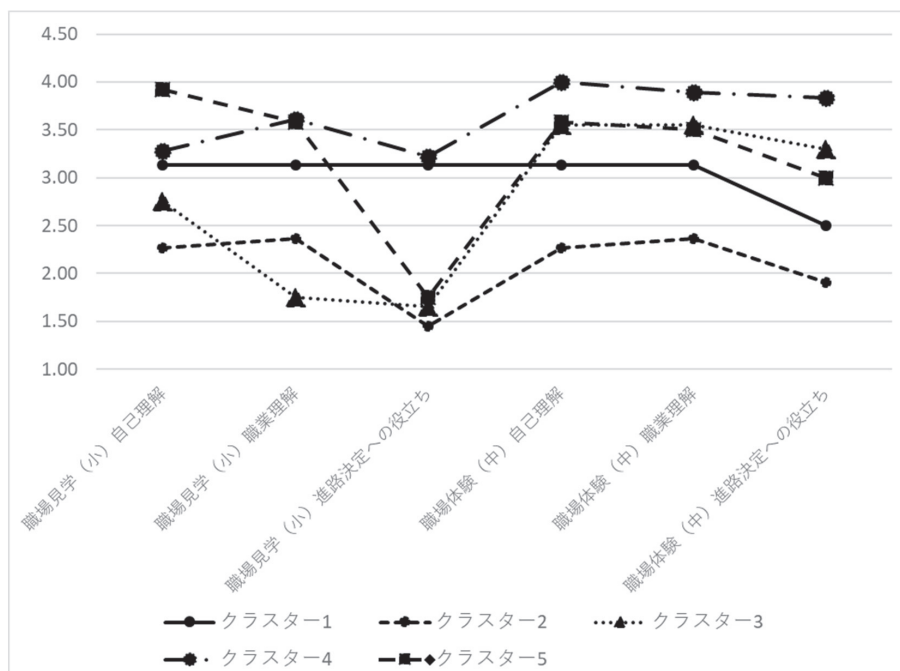


Figure 2. クラスター別にみた小学校での職場見学および中学校での職場体験での認知の変化の特徴

Table 4. クラスター別にみた小学校での職場見学および中学校での職場体験での認知の変化の得点と分散分析の結果

	小学校 職場見学			中学校 職場体験			
	<i>n</i>	自己理解	進路(職業, 上級学校)理解	進路決定への役立ち	自己理解	進路(職業, 上級学校)理解	進路決定への役立ち
クラスター1	8	3.13 (0.64)	3.13 (0.64)	3.13 (0.35)	3.13 (0.35)	2.50 (0.76)	
クラスター2	11	2.27 (0.79)	2.36 (0.51)	1.45 (0.52)	2.27 (0.65)	1.91 (0.54)	
クラスター3	20	2.75 (0.79)	1.75 (0.44)	1.65 (0.49)	3.55 (0.51)	3.30 (0.87)	
クラスター4	18	3.28 (0.75)	3.61 (0.50)	3.22 (0.65)	4.00 (0.00)	3.83 (0.38)	
クラスター5	12	3.92 (0.29)	3.58 (0.67)	1.75 (0.45)	3.58 (0.52)	3.00 (0.60)	
<i>F</i> (4,64)		9.41***	38.50***	36.75***	27.10***	14.44***	16.82***

注. ****p*<.001

続いてクラスターを独立変数、基礎的・汎用的能力を従属変数とした分散分析の結果 (Table 5)、人間関係形成・社会形成能力ではクラスターの有意な主効果がみられ、多重比較の結果より小学校の進路決定への役立ち度のみ低群が小学校で低く中学校で高い群より得点が高かった。また自己理解・自己管理能力においてはクラスターの有意傾向の主効果がみられ、多重比較の結果より小学校の進路決定への役立ち度のみ低群が全て中程度群および全て低群より得点が高い傾向が見られた。これらをふまえると、小学校では体験活動等を通して自己や職業の理解をしっかりと深めるが、それを基に安易に進路選択をせず、加えて中学校の職場体験を通してさらに自己理解、進路 (職業、上級学校など) 理解を深めてその経験を進路決定に役立てるようなタイプにおいて、基礎的・汎用的能力のうち2つの能力がより高くなることが示唆された。

キャリア教育では、子どもの発達段階に応じた発達課題を解決できるように取組を展開する必要があり、中学校では自身の進路選択が課題に挙げられているが、小学校ではその前段階にあり進路選択は課題に挙げられていない(中央教育審議会, 2011)。これを踏まえると、小学校段階の発達課題は自己理解や進路 (職業、上級学校など) 理解が深まることであり、それを踏まえて早々に進路選択をすることは求められていない。一方中学校段階の発達段階は自己理解と進路 (職業、上級学校など) 理解が深まり、かつそれを基に自身の進路を選択することが求められている。本研究の結果より、各発達段階での体験活動を通してその発達段階の発達課題が達成されることが、将来、すなわち大学段階での基礎的・汎用的能力の形成に大きくはないが貢献する可能性が示唆された。

Table 5. クラスター別にみた基礎的・汎用的能力の得点と分散分析の結果

	<i>n</i>	人間関係形成・ 社会形成能力	自己理解・ 自己管理能力	課題対応能力	キャリアプランニング 能力
全て中程度群	8	3.22 (0.54)	2.63 (0.52)	2.59 (0.60)	2.75 (0.60)
全て低群	11	3.16 (0.34)	2.67 (0.61)	2.50 (0.56)	2.76 (0.63)
小学校で低く中学校で高い群	20	3.03 (0.21)	2.82 (0.38)	2.66 (0.49)	2.86 (0.46)
全て高群	18	3.22 (0.39)	2.83 (0.33)	2.74 (0.41)	2.84 (0.34)
小学校の進路決定への役立ち度のみ低群	12	3.50 (0.43)	3.14 (0.33)	2.77 (0.38)	3.00 (0.26)
<i>F</i> (4,64)		3.17*	2.48†	0.62	0.52

注. * $p < .05$, † $p < .10$

本研究の意義と課題

本研究では異なる学校段階での体験活動を通しての自己理解や進路 (職業、上級学校など) 理解の積み重ねによる効果について検討するため、児玉 (2019) のデータを再分析した。その結果は、各学校段階の体験活動を通して自己理解や進路理解を深める経験を積み重ねることが自身の進路選択に役立つことや、さらに各発達段階での発達課題を達成することが、その後のキャリア形成に必要な能力の一つである基礎的・汎用的能力の形成に貢献することを示唆していた。

なお本研究で用いたデータはあくまで大学生が小・中・高等学校時代を回想したものであり、正確性に欠ける。縦断的な調査を行い、各学校段階でどのような活動を体験する中でどのような自己理解や進路 (職業、上級学校など) 理解を積み重ねているのか、それがその後のキャリア形成にどのような影響を及ぼしているのかについて検討するような、さらなる研究が望まれる。

引用文献

- 中央教育審議会 (2011). 今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について (答申) Retrieved from http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2011/02/01/1301878_1_1.pdf
- 児玉真樹子 (2019). 小・中・高等学校におけるキャリア教育の啓発的経験の効果—大学生を対象とした調査— 広島大学大学院教育学研究科紀要第一部, 68, 1-10.

三村隆男 (2008). 新訂キャリア教育入門 その理論と実践のために 実業之日本社.

大嶋玲未・廣川佳子・宮崎弦太・芳賀繁 (2016). 大学生の基礎的・汎用的能力の測定の試み キャリアデザイン研究, 12, 145-155.

Parsons, F. (1909). *Choosing a vocation*. Houghton, Mifflin and Company.

渡部昌平・渡部諭・小池孝範 (2015). キャリア形成における自己理解・仕事理解・啓発的経験の構造および啓発的経験の理解内容による効果の違いに関する探索的研究 教育カウンセリング研究, 6, 35-40.